よきおとずれ

カトリック釧路教会だより

第 26 号　主のご降誕（2023 年 12 月 25 日）発行

クリスマスがやって来る…

ヨアキム　川上　剛　神父

今年もまた、クリスマスが来てしまった。毎年のことではあるが、迎えるというよりは来てしまうというのが実感である。特に、今年は兄弟・プポが修道院の玄関の片隅に作った馬小屋を眺めつつそれを強く感じているが・・。皆さんはどうだろうか。

そう、クリスマスは来てしまうものなのだ。何しろ「クリスマスは神がイエスにおいて、この世界に人間の思いを超えて、一方的に一人の人間として入ってこられた」ことを祝う祝いだから。神が一人の人間としてこの世の歴史の中に入ってきた。常識的には考えられない驚くべき事実である。おとぎ話、神話のたぐいとは全く違う次元のこととして、我々ひとり一人にその神を信じるかどうかを突き付けるのだ。

我々はイエスを救い主としてクリスマスを迎えるが、知ってのとおりキリストのこの世における居心地は決していいものではなかった。宿なしで生まれ、虐殺寸前で外国に逃げ、ようやく落ち着くことのできた故郷は「良いものなぞ出るはずのないナザレ（ヨハネ福音書１章）であった。生い立ちだけではない。彼の公生活３年間は旅から旅、彼の名声も真実を理解したものではなく、結局は裏切られ、無法な裁きによって十字架上で刑死する。

では「神はいないのか」・・・、あのベトレヘムの飼い葉桶の小さく貧しいイエス～それは十字架上で身をさらしたイエスの姿でもあるが～に眼をそむけず向き合い続ける。そこにクリスマスを祝う隠された真の意味を見出せるはずである。

アシジの聖フランシスコは晩年グレッチオの町の郊外で実物の人間、家畜などを使い家畜小屋を作ったと言われているのはそのためだった。これが世界中で祝われているクリスマスのいわゆる「馬小屋」の始まりである。

聖フランシスコは「さあ、みんなで一緒に私たちのためにあえて貧しい人として生まれた神を迎えよう！」と多くの人をそこに招き、共におられ、もう一度来られると約束されたゆるしの神、愛の神を共に分かち合うことを願い、教皇の許しを得て「馬小屋」を再現したと言われている。

キリストの生涯に織りなしている悲惨は、今の我々の世界の現実でもある。戦争、格差、気候危機、無関心、貧困など・・。「神が我々とともにいる・インマヌエル」のクリスマスの福音はこの悲惨さを見つめる深い眼差し、その叫びを聴く鋭い耳と、さらにそこに向かう勇気ある一歩を踏み出す足をもたらす神の恵みそのものであると言ってよい。
共に離散の民であるガザ（パレスチナ）とイスラエルの戦闘の悲惨を想い、多くの世界の難民に心を寄せ、地球をむしばむ沸騰化に思いを馳せ、そして、再審裁判中の袴田巌さんと姉秀子さんを身近に想いつつ、クリスマスを待つ・・・。
“インマヌエル、インマヌエル、インマヌエル、アーメン”
“マラナ・タ、マラナ・タ、み国が来ますように

終わりの時から今を生きる

フランシスコ・アシジ　冨田　聡　神父

私たちは今、一つの時代の終わりを生きています。今の時代は、ローマ帝国崩壊の時期と酷似した様相を呈しており、また非常に反キリスト的傾向を帯びています。私たちは、そのしるしを認めることに鈍感であってはなりません。地球温暖化や世界各地での戦争は、私たちの罪深い行いの集積であり、そこにキリスト教的な生き方の一つの敗北があることを素直に認めることこそ、回心のための第一歩です。

神は、このような人類の危機に際して、たくさんの神秘家を世に送ってくださっています。聖職者の堕落が広範に広がる中で、聖霊は小さな人々を通して真実の回心へと私たちを招いています。マリア・ヴァルトルタ氏、ヴァスーラ・リデン氏、マリノ・レストレポ氏が受けたメッセージ、またガラバンダルでの聖母のメッセージなど、教会の正式な審査が済んでいないものも含めて、神の憐れみがここまで直接的に示された時代も他にはありません。

これら現代における聖霊の御業は、神が裁きをちらつかせながら私たちを脅す方なのではなく、完全な憐れみであるがゆえに、それがある者にとっては救いとなり、ある者には裁きになるという神秘を告げています。つまり、生きているうちに神の憐れみ深さや、ゆるしへの信頼を、ゆるしの秘跡や聖体を通して培っているならば、終わりの日の神の裁きは確かに私たちにとって救いの日となるでしょう。しかし、この神の無限の愛とゆるしを信頼することができずに、罪を隠し持ったまま生きるならば、神のあわれみ深さ

のものが、その人にとって耐えがたい痛みとなり裁きになってしまうのです。ですから今、神の愛に触れることこそが肝要です。キリストは今も聖櫃の中でこの地上に現存しておられます。諸秘跡を通してご自身を私たちに与えようとされています。このキリストと心と心で語り合うような祈りを日々の生活の中に取り入れてゆきたいものです。

そこから、本当の回心が生じます。愛された者として生きていきたいという心の一番深くにある願いに正直になることができます。

果たして、私にとってキリストとは誰なのでしょうか。その答えが、遠い偉人や手厳しい方ではなく、なんでも語り合うことのできる最高の友でありますように。自分の罪を、信頼によって愛の絆に変えていただきながら、目覚めた心で今を生きてゆくことができますように。

9月3日の交流会

幼きイエズスのテレジア　亀岡延枝コグト

長い間、コロナ禍のため黙想会や交流会が出来ませんでしたので、さてどうなることかと心配しましたが、御ミサの後の交流会は本当にみんなが一つになって心から楽しめた愛にあふれたイベントになりました。

内容としましては、まず２グループに分かれて笑いを誘う、ほっかぶりをしてサインはＶのゲーム、皆さん、なかなかお似合いでした。ジャンケンの強い木内さんと高橋さんには脱帽！プポ神父様も対戦して負けてしまいました（残念！）。

ビンゴゲームの後は、おにぎりで昼食。その後は参加者各自の自己紹介や趣味などを話してくださり、少しはみんなで知り合えたのではないでしょうか。笑い疲れた人々の顔は帰る時には幸せいっぱいに輝いていました。３３名の参加者の皆様、アンナ会の皆さん、行事委員会の皆さんのご協力に心から感謝申し上げます。

信者さんはたくさんいらっしゃいますが一度も一緒にお話ししたことがない方もいますし、ただの挨拶だけの方々もいますが、教会の一員であることは皆、兄弟姉妹なのですからもっともっと声かけをしていく必要性があると感じました。コロナやインフルエンザがまだまだ収まらず、心配ですが神様が見守ってくださり、たくさんの愛をくださっていることを心から感じる交流会でした。神に感謝！

神に感謝

ｸﾞｪﾝ・ﾃｨ・ﾎﾝ・ｽﾞｴﾝ（霊名テレサ）

皆さん、こんにちは。

厳しい寒さが続いておりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

釧路教会に来てから、もう一年半になりました。いつの間にか時間は流れてしまったようです。当時、私はまったく知らない異国にやってきて生活を始めたため、言葉が通じないことに戸惑い、経済的困窮への不安感がありました。それでも明るく振る舞い、前向きに人を助けたりしていくうちに何とかなりそうな気がしてきました。

そして教会に来て良かったという気持ちをずっと持っています。それは、私が仕事で悩んでいた時、神が長い時間、私の話を聞き、最後に必ず強く抱きしめてくれたことからです。

今、私は彼氏と一緒に教会に通っています。彼の名前はフィといいます。

フィは現在、カトリックの教義を勉強していて来年、カトリック教徒になる予定です。日本で釧路教会は私たちにとって第二の故郷になりました。

私の胸の中に、神への感謝の気持ちが一杯あります。皆さんには大変お世話になっていることを心から感謝申し上げます。

編集後記

カトリック新聞の読者の投稿の「声」欄に、「神様が一緒ならいつでも大丈夫」という京都河原町教会の信者さんの投稿があり、共感しました。故渡辺和子修道女のエッセーの中に登場する「だいじょうぶの小石」という話です。思い通りになるという意味の「だいじょうぶ」ではなく、「どちらに転んでも大丈夫」という小石です。文章の最後は「『だいじょうぶ』ではないのは、神様に耳を閉じた時だけで、神様が一緒ならば、何があっても『だいじょうぶ』なんて…本当にありがたいことです。」と結ばれています。

本当にありがたいことですね。神様の言葉に耳を傾け、神様に信頼して「だいじょうぶ」と祈りたいです。主のご降誕おめでとうございます（K.K）

カトリック釧路教会 https://kushiro-catholic.cloud-line.com/
〒085-0018　釧路市黒金町 12 丁目 10
TEL　0154-22-5823　　FAX 0154-22-5832
教会だより　編集：広報委員会